

称名寺所蔵『法門大綱』における禅思想

古瀬珠水

はじめに

称名寺所蔵『法門大綱』については、管見の及ぶ限り河村孝道氏の『金沢文庫資料全書仏典第一卷禅籍篇』（以後、『金沢禅籍篇』）の解題⁽¹⁾があるのみで、詳しい研究は今までなされていないようである。本論では、第一に『法門大綱』の構成と年代について明らかにする。第二に『法門大綱』の禅思想についていくつかのキーワードを元に議論したいと思う。（尚、『法門大綱』は影印本を元に『金沢禅籍篇』の翻刻を参考にし、読みやすいように漢字とひらがな交じりの訓読文に変えた⁽²⁾。また、他のいくつかの漢文資料も同様に訓読文に変えた。更に理解しやすいように「」、「」なども加えた。異体字は通常の字体に変えた。）

一 『法門大綱』の構成と年代

本資料は「百丈禅師広説」に合綴された一篇である。著者や由来などは不詳である。丁数は二三⁽³⁾枚、列帖、縦一六・八

センチ、横一五・二センチ、鎌倉期の写本、楮紙、校合なしである。（以上、河村氏の解題より）

先ずは、一丁から二〇丁右（『金沢禅籍篇』二二―頁上―二一九頁上）までを前半として見てみよう。書かれた内容は、世尊、西天二八祖、達磨の相伝、諸教の説明について述べ、次に「禅門宗」について紙幅を費やして論述している。その後、「或が云く」、「『金剛経』に云く」、「『起信論』に云く」、「菩提達磨云く」、「天台云く」、「五台山文殊授法照禅師の偈に云く」、「祖師云く」、「伝教大師（の嗣法）」、「慈覚大師将来記」に云く、「『智証大師将来記』に云く」、「祖師云く」、「古人云く」等々、専ら引用文を列挙している。但し、引用文のみを掲載する場合と、その前後に著者の釈文を叙述する場合がある。いずれにせよ、「伝教大師（の嗣法）」、「慈覚大師将来記」、「智証大師将来記」などから、多くの引用文の典拠は比叡山系の蔵書に基づいていることが解る。但し、「祖師云く」、「古人云く」などは『円悟語録』から引用しているようであり、初期禅宗

称名寺所蔵『法門大綱』における禅思想（古瀬）

から宋代までさまざまな禅籍から引用していることが解る。

次に、前半最後二〇丁右（『金沢禅籍篇』二一八頁下—二一九頁上）には年代を記した極めて興味深い記述が以下のようにある。

淳熙一六年、孟夏月望日に謹んで録す。

建久五年五月二三日。日本僧直念、宋に入り、始め明州延慶寺に至る。然る後、天台本院國清寺に參ず。此の寺の壁上に此の文を書す。則ち壁下に之を寫し取る。時に、宋、慶元元年乙卯二月二五日

この部分は奥書のようなものである。素直に読むならば、『法門大

綱』の著者が「淳熙一六年（一一八九）孟夏月望日」に『法門

大綱』つまり一丁から一九丁を著した。更には「建久五年

（一一九四）五月二三日」に「日本僧直念」が國清寺の壁上に

『法門大綱』を書き、その壁下に「之」を書き取り、それが

「慶元元年（一一九五）乙卯二月二五日」というわけである。⁽⁵⁾

つまり、『法門大綱』は一一八九年に著され、一一九五年以降に作成されたことが、この奥書によって解るわけである。

問題は「壁下に「之」を書き取った」とあり、「之」が何か

ということである。考えられることは、この奥書部分の後の

二〇丁左から二四丁右（後半部分）の禅語録や坐禅に関する引

用文とは考えられないだろうか。それらは、「坐禅病 如々居

士」、「見色明心」（大慧『正法眼蔵』より）、「聞聲悟道」（大慧

語録』より）、「坐禅箴」（宏智禅師述）である。果たして、國清

寺の壁下にこれらが書かれていたのだろうか。この点については今後の課題としたい。更に、天台浄土教の拠点である明州延慶寺を訪ねた後、天台本院國清寺に參じた「日本僧直念」については今のところ不詳である。但し、当時の國清寺では天台宗は稀となり、禅宗が盛行していたことが解る。⁽⁶⁾直念が國清寺に行った目的は天台宗を学ぶためではなく、当時の中國の禅宗を学ぶためと考えてもよさそうである。

二 『法門大綱』の禅思想

ここでは『法門大綱』の最初から「禅門宗」についての著者の論述部分から、特徴と思えるキーワードを抜き出してみたい。「肉骨髓」、「無念の知見」、「一行三昧」、「如来清淨の禅」、「念仏定」、「専ら本尊を念じ」等である。「肉骨髓」、「一行三昧」、「如来清淨の禅」は、後丁に「伝教大師（の嗣法）」、「慈覚大師将来記」に云く、「『智証大師将来記』に云く」とあり、最澄撰『内証仏法相承血脉譜』（以後、『血脉譜』）に基づいていると考えられる。

「肉骨髓」得説法について『血脉譜』「北齊の慧可和上」に「〔付法簡子〕云く、慧可が髓を、道育が肉を、尼総持が骨を得る」とある。一方『法門大綱』では「慧可が髓を、道育が肉を、総持が骨を得る」の後、「慧可の所解に云く、本より煩惱無し、元と是れ菩提。（中略）道育の云く、迷へば即ち煩惱、

悟れば即ち菩提。(中略) 惣持の云く、煩惱を断じて、菩提を得⁽⁸⁾と続く。『法門大綱』では『血脈譜』にない宗密撰『裴休拾遺問』中の「本無煩惱元是菩提、云々」⁽⁹⁾の考えが摂り入れられている。『血脈譜』の『付法簡子』については、伊吹敦氏に詳しい研究論文があり、氏によれば神会派内部で作られたと推察され、⁽¹⁰⁾『法門大綱』の著者が同じ荷沢宗の宗密の『裴休拾遺問』を「肉骨髓」得説法の発展と捉えたと考えられないだろうか。

次に「一行三昧」について、『法門大綱』では以下のように述べる。

禅門の宗は佛々祖々、心を以て心に傳ふ。文字を立てず。是れ文字の相離せるなり。正語を以て心を指す。心を得て詞を忘る。(中略) 未だ眼に見ずと雖も、既に心見ること了了なり。道に於いて勇有り。又、因果を撥せず。邪智執慢、何に因てか生ぜんや。是を深般若を行はずと為す。亦、一行三昧と名づく。即ち、如来清浄の禅と念佛定と相應す。誠に、是れ浄土菩提の妙因、長生不死の要術なり。(中略) 常に坐禅を好み、諸念を消落し、深く無常を觀じ、放逸に隨わず、三心具足して、(専ら)自ら虚假を離し、専ら本尊を念じて、證と為し、救と為す。⁽¹¹⁾

ここで重要なことは、『法門大綱』の著者が「禅門宗」は「如来清浄の禅と念佛定と相應す」と述べ、坐禅と念仏が修行の要素としている。また、「深般若を行はず」を「一行三昧」と名づけ、「如来清浄の禅」としている。これは明らかに、『血脈

譜』「北齊の慧可和上」の「付法簡子」云く、(中略) 我が此の法は是れ諸佛の甚深般若波羅蜜の法。亦、是れ諸佛總持の法。亦、是れ一切の法の印。亦、是れ如来禪。亦、一行三昧と為すと。⁽¹²⁾や、「黄梅東山弘忍和上」にある「文殊般若に依りて、佛を念じ、群品を引接して一行三昧に引入す。」⁽¹³⁾に依拠していると考えられる。右の「文殊般若」は二巻本『文殊師利所説摩訶般若波羅蜜經』(『文殊般若經』) 下巻を指し、以下のように書かれている。

文殊師利言世尊云何名一行三昧、佛言法界一相、繫緣法界、是名一行三昧。若善男子、善女人、欲入一行三昧、當先聞般若波羅蜜、如說修學、然後能入一行三昧。如法界緣、不退不壞、不思議、無礙無相。善男子、善女人、欲入一行三昧、應處空閑、捨諸亂意、不取相貌、繫心一佛、專稱名字。隨佛方所、端身正向、能於一佛念念相續、即是念中、能見過去、未來、現在諸佛。何以故、念一佛功德無量無邊、亦與無量諸佛功德無二、不思議佛法等無分別、皆乘一如、成最正覺、悉具無量功德、無量辯才。(『大正藏』八、七三一頁上)

「一行三昧」とは「念仏」であることが明記されている。また、この「一行三昧」は『楞伽師資記』の中で、道信と神秀の章に詳しく書かれ、それが「仏を念じる方法」であると説く。⁽¹⁴⁾

東山法門が『文殊般若經』の念仏行を重んじており、⁽¹⁵⁾『法門大綱』では、「一行三昧」の念仏行に関しては東山法門の伝統を受け継いでいると考えられる。しかし、同時に『血脈譜』(『付

称名寺所蔵『法門大綱』における禅思想(古瀬)

法簡子)の「如来禅」を宗密の「如来清浄禅」⁽¹⁶⁾と置き換えていることは、『法門大綱』の著者は、神会の影響を受けた宗密の考えも重要な思想と捉えていたことが読みとれる。

ともあれ、『法門大綱』において念仏が「禅門宗」の大事な修行であることが解った。前述した以外にもいくつか念仏についての記述があり、それに関しては別稿で紹介したい。但し、『法門大綱』における念仏は法然などの提唱した「称名念仏」とは異なり、「観想念仏」の意味合いが濃いことを記しておく。著者については不詳だが、引用する史料から天台僧であつたことは明らかであろう。尚、『見性成仏論』や『成等正覚論』との比較検討は別稿に委ねたい。

- 1 河村孝道『金沢文庫資料全書仏典第一巻禅籍篇』「総説・解題」(神奈川県立金沢文庫、一九七四、二七五―二七六頁)。
- 2 訓読文及び語句の解釈については木村清孝先生にご指導頂いた。
- 3 筆者が数えたところ、実際は「二四枚」。
- 4 「淳熙一六年、孟夏月」の年月は、大日房能忍の弟子練中と勝弁が阿育王山拙庵徳光を訪ね印可を得た年月でもあり、禅宗史研究者のなかで特別に記憶される年である。練中・勝弁の行動と当記述の関係を想像することは、実に興味のあることではあるが、今は『法門大綱』の記述を理解することに徹したい。
- 5 奥書に関しては、落合俊典先生にご教示頂いた。
- 6 「由於研習天台宗者漸稀、禪宗盛行。建炎四年(一一三〇)、詔令「易教爲禪」、國清寺成爲禪宗「江南十刹」之一。來寺參究禪

學者四海雲集、一度竟使糧食不足。」(『國清寺志』「第一章國清講寺沿革」華東師範大学出版社、一九九五、七頁)。

7 『傳教大師全集』一(日本仏書刊行会、一九六六、二〇七頁)。

8 『金沢禅籍篇』二二二頁上―下。

9 石井修道「真福寺文庫所蔵の『裴休拾遺問』の翻刻」(『禅学研究』六〇、一九八一、八二頁)。

10 伊吹敦「最澄が傳えた初期禪宗文獻について」(『禅文化研究所紀要』二三、一九九七、一六一―一七九頁)。

11 『金沢禅籍篇』二二二頁下―二二三頁下。

12 『傳教大師全集』一、二〇七頁。

13 『傳教大師全集』一、二二〇頁。

14 齋藤智寛「楞伽師資記」考——『楞伽經』と『文殊般若經』の受容を手がかりに——(『集刊東洋学』一一一、二〇一四、八一―九頁)。

15 伊吹敦「初期禪宗文獻に見る禪觀の實踐」(『禅文化研究所紀要』二四、一九九八)。

16 『禅源諸詮集都序』(『大正』四八、三九九頁中)。

〈参考文献〉

関口真大『達磨大師の研究』(彰国社、一九五七)

小林円照「一行三昧 私考——禅用語の研究についての一試論その

一——」(『禅学研究』五一号、一九六一、一七六一―一八六頁)

鎌田茂雄『禅の語録九 禅源諸詮集都序』(筑摩書房、一九七二)

〈キーワード〉『法門大綱』、一行三昧、念仏、東山法門

(鶴見大学仏教文化研究所兼任研究員)